

氏 名（国籍）	劉 沉 穎（中 国）
学 位 の 種 類	博 士（ヒューマン・ケア科学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 3762 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	中国における高校生一人っ子の精神健康度と心理社会的要因に関する研究
主 査	筑波大学教授 保健学博士 宗 像 恒 次
副 査	筑波大学教授 博士（心理学） 庄 司 一 子
副 査	筑波大学助教授 博士（学術） 橋 本 佐由理
副 査	筑波大学助教授 博士（医学） 野 津 有 司

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

これまで中国では国家的に一人っ子政策を実施しているため、一人っ子の精神健康度とそれにかかわる心理社会的要因に関する調査研究が実施されておらず、その詳しい実態は明らかになっていない。本研究により、中国高校生における一人っ子の精神健康度と心理社会的要因との関連を明らかにするとともに、中国青少年、とくに一人っ子に関するメンタルヘルス対策に向けた諸施策を検討するための基経資料が得られることを目的としている。

（対象と方法）

研究課題は次の①～⑤からなり、課題別にみた対象と方法は次の通りである。

- ①中国高校生の精神健康度と心理社会的要因に関する測定尺度の検討（中国版調査票の尺度の検討）
- ②都市部における高校生一人っ子の精神健康度と心理社会的要因に関する検討
（2000 年 4 月の調査対象；一人っ子 N = 263, 非一人っ子 N = 36 無記名自記式集合調査法）
- ③都市部と農村部における高校生一人っ子と非一人っ子の精神健康度に関する比較検討
（2001 年 6 月農村部調査対象；一人っ子 N = 168, 非一人っ子 N = 165 無記名自記式集合調査法）
- ④都市部における高校生一人っ子の精神健康度と心理社会的要因に関する 2000 年調査と 2002 年調査の比較検討
（2000 年 4 月調査対象；一人っ子 N = 263, 2002 年 9 月調査対象一人っ子 N = 323 無記名自記式集合調査法）
- ⑤ SAT カウンセリングによる都市部の一人っ子のメンタルヘルス支援介入の効果に関する検討
（2002 年 9 月介入群 14 名, 非介入群 44 名；2003 年 4 月追跡調査介入群 14 名, 非介入群 44 名）

（結果）

- 課題① 本論文で開発した中国語版尺度は、信頼性、因子的妥当性、基準関連妥当性が確認された。
- 課題②と課題③ 1) 都市部での一人っ子群は非一人っ子群に比べ、男女それぞれ神経症傾向と抑うつ傾向とその出現率が高くなる傾向が示された。また、一人っ子群の方が男女ともに、特性不安、対人依存

型行動特性、ストレス源認知は、統計学的に有意に高く、自己価値感や家族からの情緒的支援認知は、統計学的に有意に低かった。友人からの情緒的支援認知は、両群の間に有意差がなかった。2) 農村部での一人っ子群は非一人っ子群に比べ、神経症傾向や抑うつ傾向とその出現率には、有意な差は認められなかったが、一人っ子群の抑うつ傾向の出現率が高い傾向にあった。また、農村部の一人っ子群は非一人っ子群に比べ、家族からの情緒的支援認知は、有意に低く、他の要因においては有意な差が認められなかった。3) 都市部対象と農村部対象においても、家族や友人からの情緒的支援認知度の違いが、精神健康度とその心理社会的要因に及ぼす影響力の違いが明らかにされた。特に、家族からの情緒的支援認知度の度合いによって、自己価値感、特性不安、対人依存型行動特性、ストレス源認知、精神健康度などに及ぼす影響が有意に変化することが示された。また、4) 都市部対象と農村部対象においても、共分散構造分析により、周囲からの情緒的支援認知は、精神健康度とその心理社会的要因との関係において重要な役割を果たしていることが明らかにされた。

課題④ 1) 都市部の同一高校における一人っ子の精神健康度とその心理社会的要因の2000年調査と2002年の比較検討では、抑うつ傾向やそれに関連する心理社会的要因に有意な変化は認められなかった。

課題⑤ 1) SAT カウンセリング法による都市部の高校生一人っ子のメンタルヘルス支援介入の効果が明らかにされた。介入直後では、両親からの愛情認知や自己価値感が有意に上昇していた。一方で、特性不安や対人依存型行動特性は有意に低下し、自己抑制型行動特性も低下傾向にあった。また、ストレス源認知が有意に少なく、ストレス反応としての抑うつ傾向も有意に低下していた。介入後半年を経過した後のフォローアップ時点においては、介入直後の効果が良好に持続していた。また、介入群は非介入不良群に比べ、抑うつ傾向、特性不安、対人依存型行動特性、ストレス源認知が有意に低下し、自己価値感や両親からの愛情認知が有意に上昇していた。2) フォローアップ時点では、非介入両群の比較結果は、初回調査結果とほぼ等しかった。非介入不良群は非介入良好群より、依然として抑うつ傾向、特性不安、対人依存型行動特性、ストレス源認知が有意に高く、自己価値感や両親からの愛情認知の得点が有意に低かった。非介入不良群のメンタルヘルスの改善は見られなかった。SAT カウンセリング法は、中国都市部においても、その必要性や介入の効果がみられ、メンタルヘルス支援法として有効な支援法の一つであることが示された。

(考察)

1) 一般に情緒的支援認知はメンタルヘルス関連要因に影響があることが報告されているが、中国高校生に関しても情緒的支援ネットワーク認知の少なさ、とくに両親からの愛情認知の少なさが、精神健康度とその心理社会的要因に与える影響プロセスが明らかにされた。2) 精神健康度の低下の問題は、単に「ストレス源の認知」の度合いだけでなく、「ストレス源の認知」に直接強い影響を与えるのは、自己抑制度や対人依存なドストレス耐性の低い行動特性である「ストレス行動特性」である。また「ストレス行動特性」は、本人の対人依存や自己抑制などの自己イメージスクリプトを測定したものであるがそれは、両親からの愛情認知に示される親イメージスクリプトによって有意に変化することが示された。子どものメンタルヘルス発達過程における親子間の信頼関係や情緒的関係の形成の重要性が示された。

そこで、臨床的介入に際して、親に対する愛情認知とその認知能力を高めること、親イメージスクリプト、自己イメージスクリプトの改善を通じてメンタルヘルスを支援する必要性が明確にされた。3) 本介入研究では、SAT カウンセリング法による介入後の効果により、中国都市部における高校生が介入によって非介入群に比べ、親や自己イメージスクリプトや対人依存度の改善がみられ、ストレス耐性が高まり、メンタルヘルスの改善をもたらした。中国における青少年や、一人っ子のメンタルヘルス対策の支援介入モデルの一つになることを示唆している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

中国高校生一人っ子，非一人っ子における都市部，農村部の社会調査研究の方法や分析，及び介入研究の方法や，量的分析，質的分析がともに適切におこなわれているという評価を審査委員全員からえた。

介入対象については，今後トップクラスの進学校のみならずそれ以外のところでも試行し，どのような生徒にどのような介入法が望ましいかについて，詳細な検討をして欲しいというコメントをえた。

よって，著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。